とみらいテラス雑感　vol.7

士農工商

前回「幕末維新」に焦点を当て、「勝てば官軍、負ければ賊軍」という歴史観と、日本の特異性というか、日本人の寛容さからくる柔軟性に触れてみましたが、今回は江戸時代という世界史的にも稀な時期についての話になります。

江戸時代は、徳川家康が江戸に幕府を開いたことから、徳川家による治世を通してその中心地であった「江戸」に因んだ時代名称となります。歴史学的に「近世」と表記することが多いかと思います。

世界史的には、戦争や紛争が絶えなかったこの時期に、日本においては、「鎖国」と呼ばれる諸外国との付き合いをしなかった時期であると同時に、平和な時期であったことから、日本文化の隆盛期であったとも言われています。

確かに、日本史の授業では、多かれ少なかれ、このような趣旨で語られていますし、この時期には「士農工商」という身分制度があり、武士階級が特権を持ち、農民階級は貧しく、手工業者や商売をする人々は身分が低く、武士には頭が上がらないイメージがあると思います。

しかしながら、「鎖国」といっても長崎の出島では、清国やオランダと交易をしていたし、大店の店主などは、武士階級の人々に金を貸していて決して、頭が上がらなかった訳ではないのです。

『シリーズ近世の身分的周縁』では、この士農工商の間にいる人々についての記述があり、大変面白かった記憶とともに、「目から鱗」でもありました。

我が富里においても、この中で「士」と「農」の間に当てはまる人がいたのですが、あまり知られていないので、紹介がてら筆を進めてみたいと思います。

その人々は、「牧士（もくし）」と呼ばれ、徳川幕府直轄の牧で馬の生産に携わった人でもありました。彼らは、牧で仕事をする際には、武士階級と同様の扱いを受け、苗字を名乗り、帯刀や乗馬も許されていました。しかしながら、普段の生活はというと、裕福な農民ではあったものの、佐倉藩の領民でしかなく、苗字を名乗ることも、ましてや帯刀や乗馬は論外だったようです。

かつて久能にあった「藤崎牧士史料館」に所蔵されていた幾つかの貴重な品々がこの牧士のことを知る上で重要であったことから、昭和 50 年に 27 件 47 点が千葉県指定有形文化財「佐倉牧の牧士資料」として指定を受けました。この指定の資料を含めて 5,000 点を超える史・資料が、富里市に平成 25 年に寄付されています。現在、とみらいテラス２階の「郷土資料展示室」にて一部が公開されているので、是非とも足を運んでみて下さい。

吉林昌寿

とみらいテラス雑感　vol．８

自己啓発

前回「士農工商」に焦点を当て、徳川幕府直轄の牧で馬の生産に携わった「牧士（もくし)」について、千葉県指定文化財「佐倉牧の牧士資料」が、とみらいテラス２階の「郷土資料展示室」で公開しているという話をしました。

今回は、歴史系の話は一端終えて、新しいテーマとして「自己啓発」について語りたいと思います。

私は歴史好きが高じて「考古学」を学びましたが、社会に出てから自分自身が如何に物事を知らないか痛感させられました。まぁ、学生時代は自分の好きなことばかりしていて、就職についても漠然と「学んだことが活かせれば良いなぁ。」なんて呑気に構えていたことからも、社会の荒波に揉まれるフラグなこの時から立っていたのでしょう。

当然の報いとも言える事態に見舞われたのは、言うまでもなく、道に迷ったことが何度も訪れることになります。

就職早々に道に迷ったときに鈴木健二先生の『男は 20 代に何をすべきか』を読んだり、『男はつらいよ　寅さんの人生語録』（PHP 文庫）なんてのも読んだみたいです。「みたいです。」なんて何か他人事のようですが、今回の断捨離からのリスト化でタイトルや著者の情報は入力したものの、肝心の内容については、読み返している暇もなかったことから、全てについて思い出せた訳ではないので、タイトルを見て、「何でこの本を読んだんだろうか？」なんて具合なので、その程度の影響しか受けなかったのかもしれません。ただ、何かしらの知識や考え方みたいなものが身についている可能性までは否定できないので、読んで無駄なことは無かったと思いたいかな。

その後も幾度となく道に迷いましたが、娘が幼いころには、酒井美意子先生『花のある女の子の育て方』なども読んでいて、結構真面目に子育てしようとしていたのかもしれませんが、自分が子育てに協力的だったかは疑問ですし、娘が『花のある女の子』に育ったのかは、親バカが露呈するので、言及は避けておきます・・・

他にも、竹内一郎先生の『人は見た目が９割』や川田茂雄先生の『社長をだせ！　実録クレームとの死闘』、通勤大学文庫から出版された『通勤大学実践 MBA　決算書』･『通勤大学 MBA1　マネジメント』なども、多くの知識や常識を私にもたらしてくれたと思います。

吉林昌寿